

松 山 大 学 論 集
第 22 卷 第 3 号 抜 刷
2 0 1 0 年 8 月 発 行

港 湾 都 市 の 政 治
—— 愛 媛 県 八 幡 浜 市 の 市 政 ——

市 川 虎 彦

港湾都市の政治

—— 愛媛県八幡浜市の市政 ——

市 川 虎 彦

1 「伊予の大阪」から「ミカンと魚のまち」へ

愛媛県八幡浜市は、愛媛県の西部の佐田岬半島の付け根の部分に位置している。市域は瀬戸内海と宇和海に面しており、宇和海側には天然の良港が存在した。江戸時代は、宇和島藩の一部であった。現在の八幡浜市の中心部は埋立地であり、埋め立ては1754年ごろから始まっている。また、この頃より、宇和島藩内で最も利益をもたらすことになる櫛がつくられはじめ、木蠟製造が始まる。農民の中には、木蠟製造や販売にたずさわる商工業者に転じるものがでてきた。これらの業者の1つに、後に八幡浜市長を輩出することになる菊池家があった。菊池家は木蠟によって得た利益を蓄積し、明治維新後、汽船八幡丸を新造し、大阪との定期航路を開いた。以後、買出船交易が盛んになり、八幡浜は大阪で買い付けた商品を四国西南部や九州方面に売りさばく中継地として繁栄することになる。このような状況から、「伊予の大阪」なる異名をとることもなった。

また、この地では、江戸時代から、農漁家の副業として木綿が盛んに織られていた。明治になると、次々と機屋を開業するものが現れ、九州方面に販路を開拓していった。浮き沈みはあったにしろ、西南戦争、日清戦争などを機に綿織物工業は生産が拡大していった。1878年には、愛媛県で初めての銀行・第29国立銀行が、隣接する川之石（現在八幡浜市の一部）に設立され、八幡浜支店も置かれた。1893年の時点で、「西宇和郡の織物の生産高は、木綿縞二一

万五三四〇反（県全体の約五〇％），緋三万二一〇〇反（県全体の約一〇％）』（『八幡浜市誌』P. 658）だったという。

1900年代になると、菊池市太郎によって菊池式足踏機が考案され、これが普及していった。また、各業者が力織機を導入していくことになる。船舶の性能が向上し、直接取引が主流となり中継交易が衰えると、八幡浜の海運業者はこうした製造業に資本投下するようになる。第1次世界大戦が始まると、海外に市場が広がり、「縞三綾」（広巾織布）が輸出の主力となっていく。1920年頃になると、隣接する自治体との合併が具体的な課題として論議されるようになる。だが、この時は実現されなかった。その後、1929年に矢野崎村から、八幡浜町への合併の要望が出され、実現に至る。その翌年、さらに神山町、千丈村、舌田村との2町2村の合併が実現し、人口は3万人を超えて市政が施行された。新居浜や西条の市制施行に先がけ、愛媛県内で4番目の市となったのである。

表1 市域の変遷

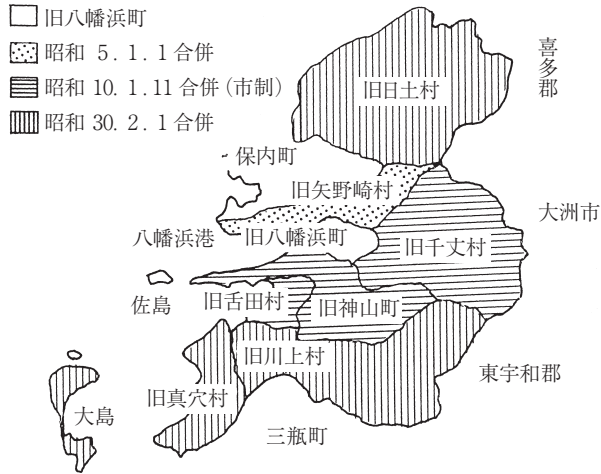
年 月 日	人口(人)	面積(km ²)	概 要
1989年12月15日			町制施行
1930年1月1日			矢野崎村を編入
1935年2月11日	30,181	39.35	八幡浜町・神山町・千丈村・舌田村合併 市制施行
1955年2月1日	55,471	94.80	双岩村・日土村・川上村・真穴村を編入
2005年3月28日	42,659	132.95	八幡浜市・保内町合併

注）『八幡浜市誌』P. 4～5などから作成。

第2次世界大戦によって、八幡浜の繊維産業もいったんは打撃を受ける。しかし、戦後すぐさま活況をとりもどし、1949年には「ガチャ萬」と呼ばれる好景気を享受した。その後、生産過剰、衣類の多様化、発展途上国の追い上げなどにより、織物業は衰勢に向かっていき、ついには消滅してしまう。

水産業も、八幡浜の主力産業の1つであった。大正年間に沖合底曳き網漁業（通称トロール漁業）が八幡浜の地に導入された。2艘曳きといい、2つの船

図1 市域の変遷
(昭和57年市統計書)



出所)『八幡浜市誌』P. 5

注)『八幡浜市誌』の原図には、「旧舌間村」との誤植があった。
本図は「旧舌田村」と訂正してある。

で1つの網を曳き、魚を文字通り一網打尽にする漁法である。効率的に魚を取ることができる反面、漁業資源の管理や海底の環境保護の面から根強い批判もある漁法である。最盛期には27統54隻が操業していたという。現在は大幅に数を減らして、わずか1統2隻にすぎない。かつての八幡浜は水産業の一大中心地だったため、八幡浜水産市場は「四国一の水産市場」とされてきた。しかし、漁獲高の減少にともない、水産市場の取扱高も1万トン程度にまで急減してしまっている。

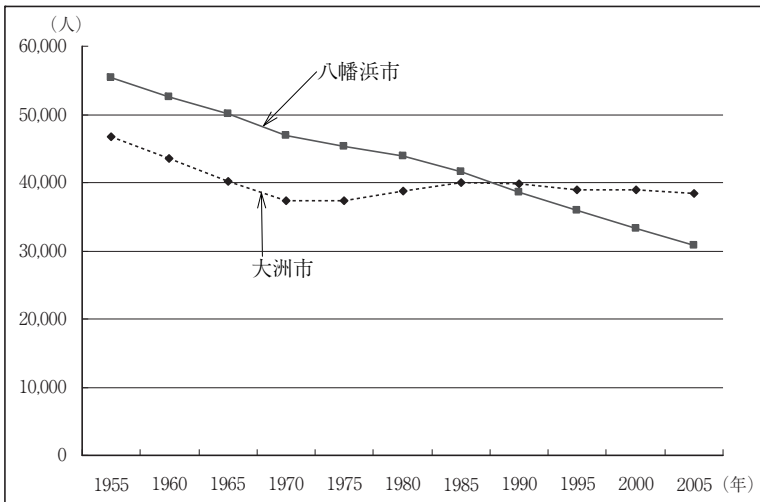
水産業と並んで八幡浜の重要な産業であったのが農業である。戦後の八幡浜農業は、繊維産業の衰退にあわせて繭の生産が激減していき、1980年代初めには0になってしまう。かわって主力産品となっていくのが、柑橘類である。特に温州みかんは1956年-5,564トン、1965年-15,931トン、1975年-

表2 八幡浜市・大洲市の人口の推移 (人)

年	八幡浜市	大洲市
1955	55,471	46,813
1960	52,527	43,583
1965	50,005	40,165
1970	46,903	37,324
1975	45,259	37,294
1980	43,823	38,719
1985	41,600	39,915
1990	38,550	39,850
1995	35,891	38,937
2000	33,285	39,011
2005	30,857	38,458

注) 2005年の数値は、八幡浜市・大洲両市とも合併前の旧市域の値。

図2 八幡浜市・大洲市の人口の推移



注) 2005年の数値は、八幡浜・大洲両市とも合併前の旧市域の値。

49,100 トンと生産を拡大していった。八幡浜のみかんは、品質面でも高い評価を得ていた。しかしみかん生産は、1970年代に入ると、全国的な生産過剰状態にみまわれ、さらに農産物輸入自由化拡大の圧力にさらさるようになった。その結果、みかんの価格が低迷するようになる。こうした状況の中、今でも温州みかんは八幡浜農業の基幹作物で、合併前の2004年時点でみると、42,500 トンを生産し、県内自治体最高の生産量を維持している¹⁾。

製造業がふるわず、新たな企業立地も進まない中、「ミカンと魚のまち」という言葉に象徴されるように、果樹栽培と水産業が市の基幹産業と位置づけられた。しかし、1980年代以降、みかんの価格も魚価も低迷するようになり、八幡浜の苦境は一層深まることとなった。

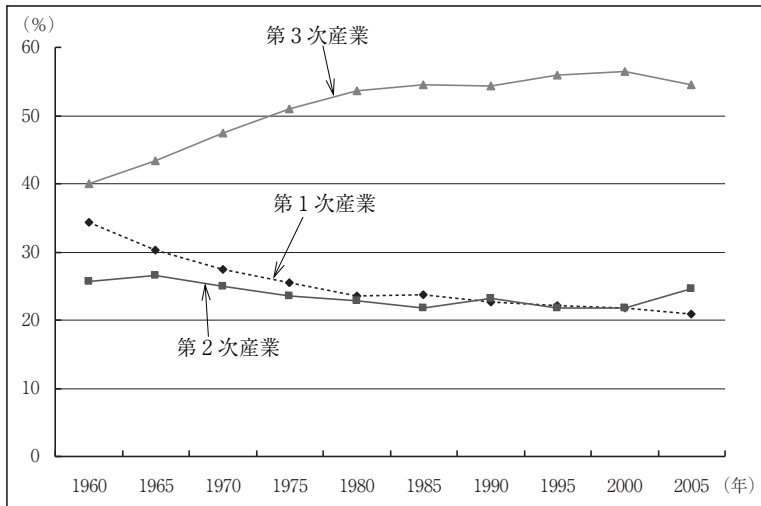
以上のような市の産業の動向を反映して、八幡浜市の戦後の人口は、文字通り右肩下がりで、一直線状に減少していった。同じ南予地域に存する都市である大洲市が、1970年代に工場誘致の効果によって人口減に歯止めをかけたのとは対照的である（図2参照）。また産業別就業者比率をみても、第1次産業の就業者比率の減少が、他の愛媛県内の都市と比べてゆるやかで、2005年の段階にいたっても、20%を超えていた。

表3 八幡浜市の産業別就業者比率

(%)

年 度	第1次産業	第2次産業	第3次産業	就業者総数
1960	34.4	25.6	40.0	23,211
1965	30.2	26.5	43.3	23,046
1970	27.5	25.0	47.5	23,115
1975	25.5	23.5	51.0	21,515
1980	23.6	22.8	53.6	21,366
1985	23.8	21.7	54.5	20,109
1990	22.6	23.1	54.4	19,039
1995	22.1	21.7	56.0	18,159
2000	21.7	21.7	56.5	16,396
2005	20.8	24.6	54.6	21,778

図3 八幡浜市の産業別就業者比率



すでに述べたように八幡浜は、かつて「伊予の大阪」と称されほどの商業の中心地だった。年間小売業販売額を大洲市との比較でみると、そのような伝統の下、製造業出荷額や人口で大洲市に抜かれた後も、八幡浜市は優位性を保っていた。しかし、伊予大洲駅前に大型の商業施設ができたことを契機に、1990年代後半になると、ついに商業面でも大洲市が優勢になる。今日では、八幡浜市から大洲市へ購買力の流出がみられ、立場が逆転してしまった。

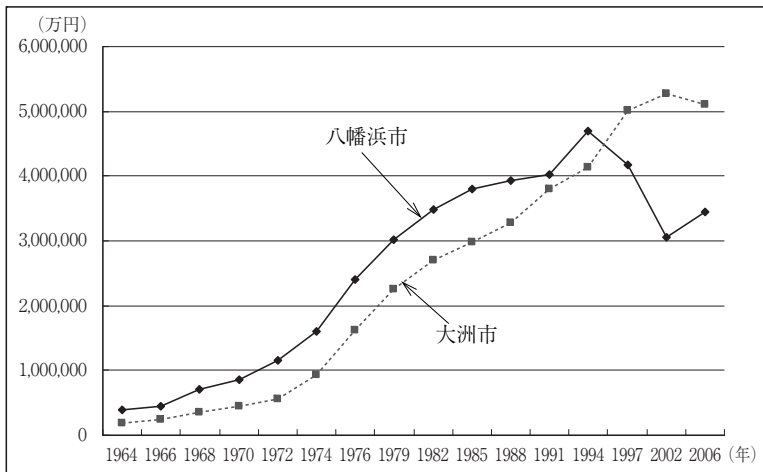
かつては港湾都市として発展し、繁栄の歴史を築いた八幡浜市であった。しかし、戦後は衰退の影がぬぐいがたい。2000年には、運輸省が八幡浜港を重要港湾指定から外すという象徴的な決定も下された。第2節では、このような衰退都市と化した八幡浜市における政治の動きを、年代を追ってみていくことにする。

表4 八幡浜市・大洲市の年間小売業販売額の推移 (万円)

年	八幡浜市	大洲市
1964	396,152	191,621
1966	449,773	246,690
1968	709,354	346,627
1970	861,953	443,228
1972	1,151,913	564,772
1974	1,602,844	940,125
1976	2,397,249	1,623,063
1979	3,010,366	2,257,310
1982	3,485,459	2,693,787
1985	3,807,397	2,983,510
1988	3,923,049	3,287,866
1991	4,020,451	3,799,850
1994	4,689,612	4,128,995
1997	4,177,471	5,016,260
2002	3,054,435	5,272,385
2006	3,452,057	5,110,780

注) 2006年の数値は、大洲・八幡浜両市とも合併後の新市の値。

図4 八幡浜市・大洲市の年間小売業販売額の推移



注) 2006年の数値は、大洲・八幡浜両市とも合併後の新市の値。

2 八幡浜市の市政

2-1 戦後混乱期～菊池市政

第2次世界大戦中、八幡浜市長は野本吉兵衛が務めていた。敗戦後、野本は公職追放となり、1947年4月に公選で新しい市長が選ばれることになった。立候補したのは菊池清治、兵頭常利、浦中友治郎の3名であった。

菊池清治は、宇和島中学から一高、東京帝大の物理学科へと進んだ。卒業後、1914年に28歳で八幡浜町長に就任している（1918年9月まで在任）。その後、一高講師、松山高校教授を経て、広島高校長、松山高校長を歴任した人物である。若い時期に短期間、地方自治の現場にたずさわって以降は、一貫して研究者・教育者としての道を歩んできた。

一方、侠客の家に生を受けた兵頭常利は、八幡浜商業に進んだ後、八幡浜市内で興行主として活躍した。1943年には、八幡浜市会議員選挙で初当選を果たしている。この市長選出馬時点で、55歳であった。

浦中友治郎は、日本法律学校（現日本大学）卒業後、八幡浜商業銀行に入行した。そこで専務取締役にならば昇任した。1903年には県議員に就任した。さらに、1926年から35年まで、最後の八幡浜町長を務めた。町長として、周辺4か町村との合併に尽力し、市制施行を実現した。当然、初代八幡浜市長の最有力候補とも目された。しかし、初代市長は、元神山町長の酒井宗太郎にゆずるところとなった。今回、満を持しての立候補であった。

市長選は、当初、兵頭と浦中の間で争われると思われており、庶民層に人気のある兵頭有利とみられていた。ところが、不出馬を表明していた菊池が、突如、立候補の意思を示し、三つ巴の激しい選挙戦となった。結果は、急速な追い込みが功を奏した菊池の逆転での当選であった。八幡浜の地に、学者市長という変り種が誕生したのであった。

1951年の市長選は、市議会副議長の魚部牧太郎の出馬が噂された。しかし、魚部は県議選に回って当選を果たす。このため、菊池は、無投票で再選を果た

すことになる。

こうして、戦後の混乱期、学者出身の市長が八幡浜市の再建を担った。この時期、他の自治体と同じように、財政上の手当てがされないのに、新学制の施行にともなう中学校の整備や、自治体警察の発足もあり、市財政は窮迫した。一方で菊池は、2期目に、国の合併推進策が示される中で、周辺4か村の編入合併を実現にもっていった。

2-2 衰退への序曲～野本市政

1955年の市長選は、合併から2ヵ月後、拡大した市域を舞台に行われることになった。当初、現職の菊池清治は3選をめざして出馬する意向であった。これに対して1947年の市長選で菊池に敗れた兵頭常利が、菊池市政を消極的な市政と強く批判し、再び菊池と市長選で争う構えをみせた。

一方、公職追放が解除された野本吉兵衛も、市長選に立候補する意志を示した。野本は、この地域きっての素封家に生まれ、宇和島中学から高千穂商業学校に進んだ。1926年、20代で八幡浜町議に初当選。以後、八幡浜市議、八幡浜市助役(1940年10月～1941年7月)を務め、1941年7月から1946年3月まで、戦中・戦後の時期に市長職に就いていた。1942年4月の衆院選では、愛媛3区から翼賛政治体制協議会推薦で立候補し当選を果たしたので、衆議院議員を兼任した²⁾。これらの戦中の経歴のため、連合国占領下では公職追放を受けていた。

反兵頭陣営では、菊池市長と野本との間で話し合いが行われ、菊池が立候補を辞退し、野本に候補者一本化するという調整が成った。こうして市長選は、兵頭と野本の一騎打ちとして争われることになった。兵頭は、旧市を中心に庶民層に浸透し、一步有利という情勢であった。野本は、新しく編入された地域に強く、菊池市長ら市の上層から支持を受けていた。結果は、終盤追い上げた野本が3,000票差をつけて、逆転勝利した。兵頭は、1947年につづいて、再び苦杯をなめた。

野本市政が、早急に手をつけなければならなかった問題が財政再建である。1955年中に、第1次財政再建計画が策定され、実施に移される運びとなった。野本は、1959年市長選を無投票当選で乗り切った。野本市政2期目の1960年に、八幡浜港が重要港湾に指定された。また、1961年度をもって、第1次の財政再建問題も、一応解消をみた。しかし、翌年には再度赤字財政に転落してしまう。結局、野本市長は、破綻寸前の市財政を後任者に残して、市長の座を降りたのである。

2-3 財政問題に直面した地下足袋市政～魚本市政

1963年の市長選において、2期かぎりでの退任を表明した野本市長の後継として名乗りをあげたのが、高田重二であった。高田は、神戸高商を卒業後、八幡浜市役所に入る。40代半ばで助役に就任し、1946年6月から1963年3月まで17年近くにわたって、その地位にあった。菊池市政、野本市政を、いわば片腕として支えてきた人物であった。

これに対して魚本義若が市長選に立候補する意向を示した。魚本は、高等小学校卒業後、家業を継ぐ。そのかわり、20代の若さで矢野崎村村議に当選を果たす。1935年に八幡浜市が成立すると、2期、市議を務める。1938年から1947年までは、愛媛県会議員の地位にあった。魚本はトロール船を建造し、近代漁法をいち早く取り入れた人物である。各種の漁業関係の組合長を兼任し、愛媛県の「底曳網漁業育ての親」と称されていた。戦後は、1955年の愛媛県議選に八幡浜市選挙区から立候補し、当選を果たす。しかし、1959年の県議選では再選を阻まれてしまう。63年になって、再度、県議選を目指すのではとも見られた時期があった。しかし、市長選を選択して出馬してきた。

衆議院の中選挙区制下における旧愛媛3区は、愛媛県の西南部(通称：南予)一帯を選挙区域としていた。その3区内でも、宇和島市を中心とする南部と、八幡浜市・大洲市を中心とする北部にわけることができる。この時期、愛媛3区の北部を地盤とする自民党代議士が2名いた。八幡浜出身の高橋英吉と西宇

和郡伊方町出身の毛利松平であった。この兩代議士の陣営も、また八幡浜市選出の自民党県議・清水新平も、高田と魚本の、どちらにつくか決めかねるような状態であった。代議士たちが旗幟を鮮明にしない一方で、それぞれの陣営内部が、高田、魚本の2派に分裂して、選挙戦に突入していった。

八幡浜には「白足袋族」なる呼称が存在した。商工業で成功した地方名望家たちのことを指していた。魚本は、野本市政を「沈滞した白足袋市政」と批判し、「白足袋市政から地下足袋市政へ」と訴えた。漁業の世界で生きてきた魚本自身は、「地下足袋」だというのである。こうした呼びかけによって、漁業関係を中心に、庶民層への浸透をはかった。

一方の高田陣営には、当初、調整による一本化工作による無投票当選への期待があった。このため、出足が遅れることになる。しかし、野本前市長、菊池元市長をはじめ、商工会議所会頭ら、多くの市内有力者の支援を受けた。その高田は、野本市政の継承を掲げた。

こうした市を二分する激戦の結果、魚本が競り勝って市長の座を射止めた。高田が、野本市政を踏襲するとしたことで、「白足袋市政」への批判票を魚本に集めさせる結果になったことが、魚本の勝因の1つにあげられた。また、水産関係者の組織力がものをいったともいわれている。

魚本市長は「生き生きした地下足袋市政」を標榜し、文化センターや水族館の建設、さらには内港埋め立てによる土地造成などを公約に掲げていた。誰の目にも衰退があきらかになってきていた八幡浜市に、かつての繁栄を取り戻そうとの意気込みをみせた。しかし、魚本市政はすぐに財政問題に直面する。このため、野本市政時に議会で議決されていた栗野浦の中小工場団地の土地造成事業の着手は、見送られることになる。また、重要港湾に指定された八幡浜港の埠頭整備事業も中止された。それでも財政難は解消されず、1966年11月に、第2次財政再建計画が発表されることになる³⁾

2-4 財政再建の時代～清水市政

1967年の市長選において、魚本義若は再選をめざした。そこにたちはだかったのは清水新平である。清水は、八幡浜商業を卒業後、日土村役場に入った。1934年に助役に昇任し、1940年1月には村長に選ばれている。この時、37歳であった。村長職は1944年6月まで務めた。敗戦後、公職追放を受ける。追放中は、農業に従事する。追放解除後、1955年の県議選で、魚本とともに初当選をかざる。以後、3期連続当選を果たす。この間、森林組合長や西宇和青果農協の組合長なども歴任している。

清水は67年1月には立候補を表明し、着々と市長選の準備を進めた。出身地の日土地区を固め、森林組合、青果農協などの支持を受けた。また、毛利松平代議士系の組織も清水を支援し、地元の有力企業丸三産業の社長が後援会長にすわった。

一方、魚本は、現職でありながら、選挙戦には出遅れた。しかし、地盤の漁協や蒲鉾組合など、水産関係の団体の支持を受け、地元の向灘や矢野崎地区を固めて、巻き返しに出た。また、高橋英吉代議士が後援会長に就き、一足早く県議に当選した平田久市も魚本陣営で動いた。また、もう1人の八幡浜市選出の県議である兵頭定雄は、社会党所属ではあるが魚本と同郷の向灘出身ゆえ、魚本支持に回った。

選挙戦は、魚本が出遅れを取り戻し、現職の強みと革新票の取り込みで、若干優位かと思われた。しかし、長い政治経歴をもつ清水が、約500票差で大激戦を逃げ切った。これは、八幡浜市長選史上、最も僅差の投票結果であった。清水は、早めの取り組みが功を奏したとされた。

清水は、財政再建を公約の第一に掲げての当選だった。そして、すぐさま市役所の職員定数の削減や給与の見直しに手をつけた。清水市長は、次も財政再建を掲げて1971年の市長選に立候補し、無投票で当選を決めた。その71年度末に、財政再建を成し遂げた。9ヶ年計画を3年前倒しの6年間で完了させた。1972年からは、往來が増加傾向にあったフェリー用の栈橋の改修、増築

に着手し、四国の西の玄関口としての体裁を整えていった。

結局、魚本市長、清水市長の12年間は、そのほとんどが財政再建に費やされた。この魚本市政から清水市政にかけての時期とほぼ同じときに、大洲市では村上清吉市長（1965年2月～1977年2月在任）が辣腕をふるっていた。八幡浜市が財政問題に翻弄されているのを尻目に、大洲市では積極的に工場誘致策を展開し、これが功を奏して人口が下げ止まったのである。また、この大洲市の工場誘致策によって、八幡浜から大洲へ工場が流出する現象も起きたのであった。

2-5 失われた16年～平田市政

清水市長が2期かぎりで市長を退いたため、1975年の市長選は、新人3人で争われることになった。その3人とは、平田久市、山本勇夫、西園寺秋重であった。

平田久市は、八幡浜商業卒業後、軍隊生活を送る。復員後、水産加工業界に職を求めた。1954年に弱冠30歳で蒲鉾組合長に就任する。1958年には八幡浜青年会議所⁴⁾理事長を務めた。1963年、八幡浜市議選に立候補し初当選をトップ当選で飾った。4年後の67年には、県議だった清水新平が市長選に回った後を受けて、自民党公認で県議選に立候補し当選。71年に再選を果たす。そして、今回の市長選には、清水市長の勇退の後を受けての出馬となった。自民党県議だった平田は、自民党からの公認を受けて市長選に臨んだ。

山本勇夫は、平田と同じ年に八幡浜商業を卒業し、同じように軍隊に応召された後、家業の蒲鉾製造にたずさわるようになる。1963年の市議選に初出馬し、平田に次いで2位で初当選を遂げた。以後3期連続当選し、3期目には市議会議長の座につく。そして、次の市長選をめざし、早くから準備を開始したのである。

西園寺秋重は日土の出身で、農業に従事していたところを佐世保の海軍工廠に徴用、その後軍隊生活を送り、高知で終戦を迎える。戦後の青年団活動の中

で、左翼思想の洗礼を受けた。土建会社を創業し、「総労働・総利益・総分配方式」という独特の経営理念を掲げた時期もあった。1959年に、33歳で八幡浜市議に初当選し、革新系無所属という政治的立場で4期連続当選する。そして、八幡浜の地に革新市政をもたらすために、ここに立候補してきた。労組の支援を受け、市民本位の政治をめざすとした。

平田・山本・西園寺は、いずれも50歳前後の同年輩。特に保守系の平田と山本は、同じ矢野町出身で、同期、しかも同業、市議初当選も同じ1963年と、因縁めいた関係にあった。選挙戦は、早くから準備を進めていた山本が優勢で始まった。それを平田と西園寺が追い上げる展開となった。山本は漁協などの支持を得て海岸部の票を固めた。一方、平田は手手地区で強いとされ、女性層にも人気があった。白熱した選挙戦は、買収工作の噂が市内に当たり前のようには流れるほどであったという。

結果は、女性層、若者層の支持を得た上、市街地を制した平田が、予想外の大差をつけて当選した。山本の「地下足袋」の候補者という訴えは届かなかった。自民党公認の市長は、大洲市において1965年に村上清吉市長が誕生して以来であった。また、戦後30年たって、戦前・戦中の政治経歴がない者がようやく八幡浜市長の椅子に座ることになった。一方、西園寺の挑戦は、八幡浜において最初で最後の革新系候補の市長選ということになった。そして、この2週間前には、兵頭定雄が4期守った県議会八幡浜市選挙区の社会党議席を失っていた。これ以降、南予地域で社会（社民）党が県議会の議席を獲得することはなくなるのである。新居浜市には、まだ泉社会党市政が健在であった。しかし、全体としてみると1975年の統一地方選は、愛媛県内における社会党の退勢をはっきりと印象づけた選挙となった。

平田久市は、この当選以後、無投票で3回の当選を重ね、通算4期16年の間、市長の座にあった。平田市政が始まった1975年の時点で、八幡浜市の人口は、同じ南予地方の大洲市の人口を8千人近く上回っていた。また、製造品出荷額でも八幡浜市の方が、大洲市よりも多かった。さらに、一応は再建なっ

た市財政も受け継いだ。しかし、平田市政16年の間に、八幡浜市の人口の減少と企業の流出は進む一方であった。工場誘致に成功した大洲市には製造品出荷額で逆に大きな差をつけられ(表4参照)、人口も下げ止まった大洲市に抜かれてしまう始末であった(表2参照)。港湾開発として、1980年から42億円をかけて行った八幡浜港内の埋め立て事業(いわゆる「出島」)は、観光施設や商業施設の誘致が思惑どおりにいかず、惨めな失敗に終わった。他の南予の市にさきがけて下水道整備を行ったとはいえ、地域の衰退に対して無策の16年間だったといえる。

2-6 過大投資の時代～吉見市政

八幡浜市長選は、1979年から3回連続で無投票であった。しかし、1991年の市長選には、5選をめざす平田久市に対立候補が現れた。それは、八幡浜市選出の県議・吉見弘彦であった。吉見は、慶応大学を卒業後、愛媛3区選出の毛利松平代議士の秘書を務めた。1975年、34歳で県議選八幡浜市区に自民党公認で、高橋英吾とともに立候補し、トップで初当選を飾った。そして、4期16年にわたって県議を務め、副議長ポストにもついていた。市長選の1年前に早くも立候補を表明し、市内の現状不満層を中心に運動を展開していった。

こうして16年ぶりの市長選が行われることになった。吉見は、衰退するにまかせられてきた市の現状を憂え、市行政の怠慢と多選批判を繰り広げた。一方、平田は長い政治経歴と県や国へのパイプの太さを訴えた。

選挙戦は、新人を待望する市民の雰囲気に乗って、終始吉見が優勢で推移した。また、多選反対の立場に立つ社会党や労組も、吉見支持で動いた。平田陣営には西田司代議士がついた。しかし、劣勢をくつがえすには到らず、ふたをあけてみると平田の倍以上の得票で、吉見が圧勝した。つづく95年の市長選は無投票で、吉見に市政が託された。吉見は、90年代の8年間、八幡浜市政の舵取りを担った。この間、かつて「伊予の大阪」とよばれ、近郷の商業の中心地であった伝統を引き継ぎ、大洲市に対して最後まで優位を保っていた小売

業年間販売額でも、ついに大洲市の後塵を拝するようになった。

吉見は、過疎化や企業流出がつづく八幡浜市の活性化策として、中心商店街の活性化や企業誘致などの根本的な対策から目を背けた。かわりに、収益性に疑問のある観光事業の開発や、必要性や緊急性の薄い余暇施設の建設に、市の貴重な資金を振り向けた。結果的に、1億9千万円を投じた脇田温泉掘削は失敗におわった。カルチャーアイランド21事業として開発された「おさかな牧場八幡浜シーロード」という名称の釣堀は、建設に18億円がかかり、さらにその後、単年度赤字分の穴埋めを毎年、市財政に強いることになる。また、市環境センターおよび周辺のスポーツ公園整備には、110億円という巨費が投じられた。そして、これらの事業が、八幡浜の人口減少に歯止めをかけるというようなことは、一切なかった。

2-7 自治体合併と財政再建～高橋市政

1999年の市長選に、吉見は3選を狙って立候補を表明した。現職の常道にしたがい関係各方面の団体の推薦を得る一方、八幡浜選出の菊池平以県議らの支持も受け、磐石の態勢で選挙に臨んだ。これに対して、県議4期の実績をもつ高橋英吾が市長選に出馬してきた。

高橋英吾は、旧愛媛3区で通算9回の当選を果たした自民党代議士・高橋英吉の実子である。日本大学卒業後、日本航空に勤務する。1975年の県議選において、吉見と同じ34歳で初当選する。その後、県議選4回連続当選を果たすところまでは、吉見と全く同じ道を歩んだ。1990年2月の衆院選で、高橋が国政の場に打って出ようとしたところから、両者の針路が分岐することになる。この衆院選の結果は、約2万票差の次点で、無所属候補だった高橋の落選であった。2年半後の1993年の衆院選では、自民党公認で立候補し、わずか1,600票あまりの差で、再び次点に泣いた。1996年の衆院選からは、選挙制度が大幅に改変され、小選挙区比例代表並立制となった。旧愛媛3区選出の自民党代議士は、ベテランの西田司が比例四国ブロックの単独候補に名簿上位で回

り、山本公一が小選挙区の愛媛4区の候補となった。自民党の公認候補からもれることになる高橋は、新進党からの公認を得て出馬した。しかし、3度目の挑戦も大差で完敗した³⁾。この間、同年齢で県議同期だった吉見は、八幡浜市長に転じ2回の当選を果たしていた。選挙制度の壁もあり、国政進出が難しくなった高橋は、一転して八幡浜市長の座を狙ってきた。またこれは、後のない戦いでもあった。

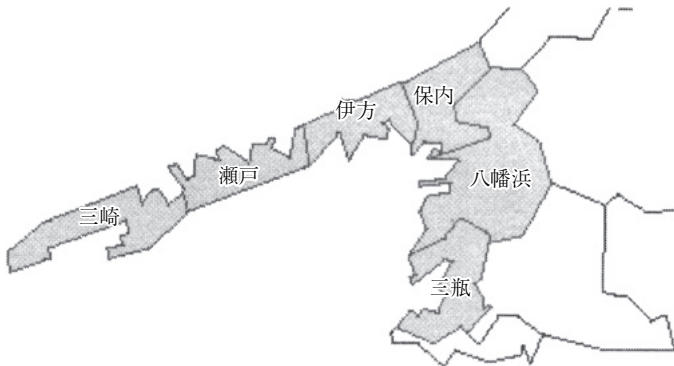
現職の吉見圧倒的有利の観測の中、高橋は徹底的な現職批判を繰り返して、追い上げをはかった。吉見が推進した公共事業を、財政悪化をまねいた無駄な大型投資と批判し、市政刷新を訴えた。知名度はあれども組織力で劣る高橋陣営は、草の根的な運動に徹し、支持の拡大をはかった。結果は、まさかの逆転勝利で高橋の初当選であった。しかも、票差が5,000票近く開く、予想外の結果であった。これには、吉見市政の進めた大型公共投資とそれにとまなう財政悪化に対する市民の批判が、想像以上に強かったということがあろう。それにもまして、止まらない人口減少や停滞する地域経済の現状に閉塞感を抱いた市民が、現状打開の期待を新人候補への投票という形で表したのだと考えられる。

2003年の市長選は、再選を狙う高橋市長に対し、県議の菊池平以が挑戦する構図となった。向灘出身の菊池は、日本大学を卒業後、吉見前市長と同じく、毛利松平代議士の秘書を務めた。吉見が県議から市長選に回った1991年に、50歳で県議選に立候補し、初当選した。95年、99年県議選にも当選を果たす。この99年県議選の時点で、定数2の八幡浜市の有権者数は27,627人であった。定数1の選挙区で、八幡浜市を上回る有権者数を数える選挙区は、大洲市・川之江市・伊予三島市・温泉郡・西宇和郡と、5区あった。長年にわたって放置されてきたこの定数の不均衡は是正されることになり、2003年県議選から八幡浜市区の定数1減が決められた。この結果、現職の自民党県議のどちらかがはじきだされることになった。こうした経緯が背景にあり、菊池平以は県議選と市長選のどちらに出馬するか迷った末、3月になって市長選に鞍替えすることを表明した。菊池は市長選立候補にあたって、自民党県連の推薦

を得た。また出身母体の漁協も、菊池を推薦し、吉見元市長派も菊池支援に回った。こうした布陣で、停滞する八幡浜の現実を前に、批判票の取り込みをはかった。選挙戦終盤では、八幡浜出身の加戸知事も菊池の応援のため、現地入りして市政刷新の雰囲気盛り上げた。

一方、高橋は財政再建の実績を掲げ、父親の故英吉代議士以来の支持者、いわゆる「高橋党」を中心に草の根選挙をつらぬいた。結果は、強固な地盤がものをいい、高橋が菊池の追い上げを抑えて再選を果たした。この高橋の再選は、八幡浜市長選史上、現職市長が選挙で再選された初めての例となった。

図5 基本パターンH



出所) 愛媛県市町村合併ホームページ

高橋市長の下で、八幡浜市は市町村合併を模索した。しかし、愛媛県下12市中最も悪とされる八幡浜市の財政事情は合併論議にも影を落とした。愛媛県当局が作成した合併の「基本パターン」では、八幡浜市と西宇和郡（保内町・伊方町・瀬戸町・三崎町・三瓶町）のいわゆる八西地区が合併する案が提示されていた。しかし、原子力発電所を域内に抱え、財政状況が良好な伊方町は、八幡浜市との合併をけんもほろろに拒絶した。佐田岬半島の突端にあった三崎町は、半島部にある3町（伊方町・瀬戸町・三崎町）の合併を選択するか、八幡

浜市との飛び地合併を選ぶかで揺れはした。最終的には、半島3町の合併を選んだ。一方、三瓶町は、東宇和郡の宇和町中心の合併枠組みに加わり、西予市の一部となった。結局のところ、八幡浜市と合併したのは保内町のみであった。八幡浜市は、あきらかに周辺自治体から合併を敬遠されたのである。

以上のような経緯を経て、2005年3月28日、八幡浜市と保内町との新設合併により新八幡浜市が生まれた。この合併を受けて、4月に新市の市長選が行われることになった。しかし、旧八幡浜市の市長だった高橋英吾以外に立候補者はなく、高橋が初代市長の座に就くことになった。

こうして高橋英吾は、旧八幡浜市長を6年、新八幡浜市長を4年、合計10年にわたって、彼の地の市政運営にあたった。10年間、依然として、人口減少に歯止めはかからなかった。吉見市政批判の象徴だった「おさかな牧場」も、結局、1999年7月に開所するしかなかった。高橋市長は、しばしば財政再建を実績として強調した。しかし、その内実は基金を取り崩して借金返済に充当しただけで、根本的解決とはいいがたかった。すでに述べたように、2000年には八幡浜港が重要港湾指定を解除された。市当局は、このような現状を打開すべく、港湾再開発に乗り出す。それは、八幡浜港の一角を埋め立て、魚市場とフェリーターミナルを一新し、周辺に観光客を呼び込めるような集客施設を建設しようというものである。国や県の補助金が入るとはいえ、総事業費約130億円という巨大投資が計画され、実行に移された。その成否が明らかになるのは、もうしばらく先のことである。しかし、自らが否定した吉見市政と同じ轍を踏まないとは、必ずしもいえないのではないだろうか。

2-8 市民活動の胎動～大城市政

2009年、新八幡浜市になって初めての市長選が行われた。3選を目指して立候補した現職の高橋英吾に対して、ともに市議であった大城一郎と山本儀夫の2人が出馬を表明したのであった。

大城一郎は、岡山商科大を卒業後、家業の製材業に従事するかたわら、青年

会議所の活動に参加した。後に八幡浜青年会議所理事長になる。2003年の市議選に38歳で立候補し、初当選を飾る。合併後の新市の市議選でも当選を果たし、市議会副議長も務めた。

山本儀夫は、大阪商業大卒業後、帰郷する。山本の実父は、1975年の市長選を平田久市と争って敗れた山本勲であった。山本儀夫は、その市長選があった4年後の1979年市議選に28歳の若さで初当選を果たす。旧八幡浜市議選では7回連続当選を果たし、市議会議長にも就任した。合併後の新市の市議にも当選し、新市議会の議長も務めた。いわば、八幡浜市議会の重鎮であった。また、山本は八幡浜市の商店街でスポーツ用品店を営んでいた。

現職の高橋英吾市長は、今回は連合愛媛の推薦を受けての立候補となった。また、実子の高橋英行が次期衆院選愛媛4区の民主党公認候補に内定しており、相乗効果で票の掘り起こしを行う作戦とも評された⁶⁾。また、2007年の統一地方選で八幡浜市・西宇和郡選挙区から立候補し初当選していた県議の梶谷大治も、高橋の応援に回った。

一方の大城は、3月に「八幡浜をほっとけない市民の会」を立ち上げ、街頭で積極的に現職批判を繰り広げた。地元選出の清家俊蔵県議も大城支援で動いた。大城は、若さを前面に押し出し、医師不足問題の解消や大型公共事業である港湾再開発の見直しを掲げて選挙活動を行った。山本は、商店街連合会の推薦を受けての立候補で、政策的な面では大城とかなりの部分で重なった。

結果は、約2,700票の大差で、大城の初当選であった。吉見が平田に勝ち、その吉見を高橋が破り、という現職落選の轍を、今度は高橋が経験することとなった。八幡浜市民の間によこたわっている市政刷新、現状打破の願望が市長選のたびに噴き出すかのような、現職完敗現象がまたもや生じたのであった。

このような八幡浜市民の行政への不満感や市の将来への危機感、市民内部からまちづくり活動を生じさせている。その1つにちゃんぼんによるまちおこしがある(西村, 2009参照)。八幡浜商工会議所青年部がまちおこし委員会を結成し、八幡浜の地に根づいているちゃんぼんを用いてまちおこしをしようと

活動を開始したのである。行政もこの動きに追随し、現在は市役所の商工観光課にちゃんぽん担当が置かれている。また、「八幡浜元気プロジェクト」という、八幡浜の活性化を目的に掲げたまちづくり団体も結成され、活動がつつけられている。

3 八幡浜市議会

八幡浜市の市議会は、南予の他の都市である宇和島市や大洲市の市議会と比べると、著しく政党化が遅れているところに特徴がある。宇和島、大洲両市で、議会の政党化が進んでいるのは、ひとえに自民党議員が多いゆえである。保守王国といわれる愛媛県の中でも、特に保守的な政治風土だとされる南予に存する宇和島、大洲両市では、保守系の候補者たちが、通常の農村地帯の保守系候補と異なり、保守系無所属としてではなく、自民党公認候補として市議選に立候補する傾向が強かったのである。しかし、同じ南予に位置する八幡浜市では、保守系候補が自民党公認で立候補するのは、むしろ例外的な現象に属した。

戦後第1回目の八幡浜市議選では、愛媛民主党が5議席、農民協同連盟が10議席を獲得した。愛媛民主党は、1946年11月に八幡浜市、西宇和郡、東宇和郡の旧政友会系、旧民政党系の保守派が集まり、「結成のための創立発起人会が伊予合同銀行八幡浜支店ホールで開かれ」、産声をあげた地域政党である⁷⁾。その後、発展的に全県的な地域政党になった。創立の地である八幡浜市において、愛媛民主党は第1回市議選に14名の公認候補を立て、5議席を獲得したのであった。農民協同連盟は、民主化の機運が高まるなか、この地で結成された政治団体であった。

第2回(1951年)の市議選で6議席を獲得したのは、自由党であった。自由党の当選者には、前回市議選では農民協同連盟や愛媛民主党で当選した者も含まれている。第3回(1955年)以降は、保守系の候補者が政党公認で立候補することが稀になる。

表5 八幡浜市議会議員選挙の党派別当選者数

西 暦	47	51	55	59	63	67	71	75	79	83	87	91	95	99	03	05	09
定 数	30	30	36	30	30	26	26	26	26	26	24	24	22	22	19	23	19
愛媛民主党	5																
農民協同連盟	10																
自 由 党	1	6															
自由民主党				1				1		3		3		3	1		
社会(社民)党	3	2	1	1	2	1		1	2	2	2	2	2	1	1	1	1
公 明 党					1	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1
共 産 党								1	1	1	1	1		1	1	1	1
民 主 党																1	
無 所 属	11	22	35	28	27	23	24	21	21	23	16	16	19	16	15	19	16

注) 1955年は、合併特例により、5つの選挙区制による選挙。

社会党は、1947年に3議席を獲得したのが最高で、あとは1～2議席をほぼ確保し、今日に至っている。公明党は1963年に初議席を獲得し、次の市議選からは2議席を維持し続けた。1995年に市議定数が削減されたのを機に、候補を1名に絞り、合併後の市議会に至るまで1議席を確保している。共産党は、公明党に遅れること12年、1975年に念願の議席を得た。しかし、定数削減によって行われた1995年の市議選で、現職が落選し議席を失ってしまう。しかし、1999年に再度議席を得ると、今日まで1議席を死守してきている。民主党は、平成の大合併後、最初の市議選で1議席を獲得したのみで、2009年の市議選では公認候補を擁立できなかった。

4 結：「ミカンと魚のまち」からの脱却は可能か

戦前、港湾都市として栄えた八幡浜市は、戦後、衰退の一途を辿った。人口でみると、1955年から2005年までの50年間で、24,614名減少している。減少率は44.4%にのぼる。この速度で今後も八幡浜市の人口減少が続くと、もう半世紀たった時点で、ほぼ消滅する計算になる。八幡浜市の人口減少の特徴は、一定の速度で持続的に、まさに右肩下がりの直線状に減っていったところ

にある。半世紀の間、毎年、継続的に約500人ずつ減少していったのである。ある時点から急速に人口が減少しはじめたとか、何かの出来事（例えば鉱山の閉山）をきっかけに、一挙に人口減にみまわれたとか、ではないのである。緩慢ではあるが、着実に減り続けたのである。

このような衰退現象は不可避のものであったのであろうか、それとも行政担当者によって食い止めることができたのであろうか。戦後の八幡浜市長の椅子には、まず元町長（菊池清治）、元市長（野本吉兵衛）といった地方名望家がすわった。この地で「白足袋族」と呼びならわされている素封家出身者たちである。彼らの市政は、対立派から「消極的」「沈滞」と批判されたように、戦後の新時代を切り開く積極性と覇気に欠けていた。その後は、現職の大城一郎（元市議）が市長に就任するまで、すべて県議経験者によって占められてきた。いわば、この地域のお馴染みの面々が、代わる代わる市政を担いつづけていったといっていいだろう。しかも、公職追放を経験した戦前派の清水新平がやっと退場したのが、戦後30年たった1975年のことである。歴代市長の政策は新機軸に乏しく、衰退していく市を活性化させるための理念や方策をもたなかった。

かつては愛媛県の繊維産業の中心地であった八幡浜は、時代の変化で繊維産業が衰退すると、それにかわる製造業を域内にもてななかった。その際、よくいわれたのが、良港である八幡浜は、逆に平地に乏しく地価水準が割高なため、企業誘致が困難である、という論理であった。こうして、いつの間にか果樹栽培や水産業が、市の基幹産業と位置づけるようになった。しかし、「ミカンと魚のまち」を標榜するような市政運営やまちづくりでは、時代の流れから取り残され、衰勢に向かうのもいたしかたがないといえよう。近代社会にあって、地域の中心的な産業が第1次産業とあっては、それ相応の街となるしかならう。

そして、1990年代以降は、成算なき巨大公共投資が行われた。これらは、八幡浜市の活性化になんら益するところがなく、後世の負担増大が懸念される

ばかりであった。

八幡浜の衰退が誰の目にもあきらかになって以降は、現職市長が予想外の大差で落選する歴史が繰り返される。八幡浜市民の苛立ちが伝わってくるかのような選挙結果である。市長選において、そうした意思表示をするようになった八幡浜市民の内部から、市の活性化を目指した活動が現れるようになった。しかし、ことここに至っては、前途は多難といわざるを得ない。

注

- 1) ここまでの記述は、主に『八幡浜市誌』を参考にした。
- 2) 第21回衆議院選挙(1942年4月30日) 愛媛3区の結果

当 野本 吉兵衛 (翼賛政治体制協議会推薦・中立)	12,956 票
当 毛山 森太郎 (翼賛政治体制協議会・旧民政党)	12,101 票
当 高島 亀太郎 (翼賛政治体制協議会・旧政友会)	9,314 票
葉師寺岩太郎 (無所属・旧政友会)	8,030 票
布 利 秋 (無所属・中立)	7,781 票
高橋 英 吉 (無所属・旧民政党)	6,503 票
- 3) 2度目の財政難の原因については、「まず第一次財政再建に無理があったこと。すなわち八五一万五千円の解消赤字のうち五五〇〇万円(六五%)は市有財産売却の財源を充当し、財政構造上、好ましい姿の解消ではなかった。次に再建期間中六か年の緊縮財政のゆりもどしを防ぎきれなかったことがあげられる」と『八幡浜市誌』P.346にある。
- 4) ちなみに、八幡浜青年会議所は、1953年に四国初の青年会議所として創立された。
- 5) 高橋英吾の衆議院選挙の記録

第39回 1990年2月18日(投票率81.8%)	
当 西田 司 (自民党)	75,180 票
当 田中 恒利 (社会党)	71,561 票
当 今井 勇 (自民党)	69,299 票
高橋 英吾 (無所属)	49,729 票
稲垣 豊彦 (共産党)	4,152 票
新宅 隆志 (無所属)	3,860 票

第40回 1993年7月18日(投票率77.3%)	
当 山本 公一 (自民党)	78,363 票

当 西田 司 (自民党)	68,710 票
当 田中 恒利 (社会党)	52,780 票
高橋 英吾 (自民党)	51,113 票
稲垣 豊彦 (共産党)	6,333 票

第41回 1996年10月20日 (投票率72.1%)

当 山本 公一 (自民党)	113,587 票
高橋 英吾 (新進党)	61,244 票
石本 憲一 (共産党)	11,314 票

第39、40回は中選挙区制で愛媛3区。第41回は小選挙区制で愛媛4区。

- 6) 高橋英行は、保守分裂、民主党への高い支持率という有利な選挙情勢をもってしても、小選挙区選挙で落選した。しかし、重複立候補した比例代表四国ブロックで、からも復活当選を果たした。

第45回衆議院選挙 愛媛4区 2009年8月30日 (投票率77.0%)

当 山本 公一 (自民党)	73,085 票
比復 高橋 英行 (民主党)	65,578 票
桜内 文城 (無所属)	44,777 票
露口 礼子 (幸福実現党)	1,365 票

- 7) 今井琉璃男『愛媛県政二十年』P.24～25

付1. 八幡浜市長選の記録

第1回 1947年4月5日

当 菊池 清治 (無所属)	5,607 票
兵頭 常利 (無所属)	4,446 票
浦中友治郎 (無所属)	3,510 票

第2回 1951年4月23日 (無投票)

当 菊池 清治 (無所属)

第3回 1955年4月30日

当 野本吉兵衛 (無所属)	15,400 票
兵頭 常利 (無所属)	11,403 票

第4回 1959年4月30日 (無投票)

当 野本吉兵衛 (無所属)

第5回 1963年4月30日 (投票率90.7%)

当 魚本 義若 (無所属) 14,346 票

高田 重二 (無所属) 13,312 票

第6回 1967年4月28日 (投票率89.9%)

当 清水 新平 (無所属) 14,015 票

魚本 義若 (無所属) 13,430 票

第7回 1971年4月27日 (無投票)

当 清水 新平 (無所属)

第8回 1975年4月27日 (投票率92.9%)

当 平田 久市 (自民党) 13,366 票

山本 勲 (無所属) 9,601 票

西園寺秋重 (無所属) 5,415 票

第9回 1979年4月24日 (無投票)

当 平田 久市 (自民党)

第10回 1983年4月24日 (無投票)

当 平田 久市 (自民党)

第11回 1987年4月18日 (無投票)

当 平田 久市 (自民党)

第12回 1991年4月13日 (投票率90.6%)

当 吉見 弘晏 (無所属) 17,142 票

平田 久市 (自民党) 8,541 票

第13回 1995年4月15日 (無投票)

当 吉見 弘晏 (無所属)

第14回 1999年4月25日 (投票率86.0%)

当 高橋 英吾 (無所属) 14,047 票

吉見 弘晏 (無所属) 9,058 票

第15回 2003年4月27日 (投票率82.3%)

当 高橋 英吾 (無所属) 12,593 票
 菊池 平以 (無所属) 8,776 票

第1回 2005年4月17日 (無投票)

当 高橋 英吾 (無所属)

第2回 2009年4月19日 (投票率75.0%)

当 大城 一郎 (無所属) 11,722 票
 高橋 英吾 (無所属) 9,084 票
 山本 儀夫 (無所属) 3,760 票

付2. 愛媛県議会議員選挙 八幡浜市選挙区

第1回 1947年4月30日 (投票率85.3% [全県])

当 宇都宮睦栄 (愛媛民主党) 6,753 票
 三好 正男 (社会党) 6,105 票
 上田 梅一 (無所属) 2,623 票

第2回 1951年4月30日 (投票率88.7% [全県])

当 魚部牧太郎 (無所属) 7,547 票
 高田鶴一郎 (自由党) 6,153 票
 長尾 高義 (無所属) 5,557 票

第3回 1955年4月23日 (投票率86.6%)

当 魚本 義若 (無所属) 7,948 票
 当 清水 新平 (無所属) 7,480 票
 兵頭 定雄 (無所属) 5,464 票
 魚部牧太郎 (愛媛県政同志会) 5,299 票

第4回 1959年4月8日 (投票率85.4%)

当 兵頭 定雄 (無所属) 9,373 票
 当 清水 新平 (自民党) 9,271 票
 魚本 義若 (自民党) 7,905 票

第5回 1963年4月17日 (無投票)

当 兵頭 定雄 (社会党)

当 清水 新平 (自民党)

第6回 1967年4月15日 (投票率81.8%)

当 平田 久市 (自民党) 9,129票

当 兵頭 定雄 (社会党) 8,820票

野口 源喜 (無所属) 7,432票

第7回 1975年4月11日 (無投票)

当 平田 久市 (自民党)

当 兵頭 定雄 (社会党)

第8回 1975年4月13日 (投票率84.0%)

当 吉見 弘晏 (自民党) 11,534票

当 高橋 英吾 (自民党) 8,404票

兵頭 定雄 (社会党) 5,982票

第9回 1979年4月8日 (無投票)

当 吉見 弘晏 (自民党)

当 高橋 英吾 (自民党)

第10回 1983年4月10日 (投票率64.9%)

当 吉見 弘晏 (自民党) 10,071票

当 高橋 英吾 (自民党) 7,828票

石本 憲一 (共産党) 1,592票

第11回 1987年4月12日 (投票率67.6%)

当 吉見 弘晏 (自民党) 9,130票

当 高橋 英吾 (自民党) 8,965票

土居 賢二 (共産党) 1,791票

第12回 1991年4月7日 (投票率81.2%)

当 菊池 平以 (無所属) 9,039票

当 清家 俊蔵 (無所属) 8,170票

平田 悦三 (無所属) 6,164票

第13回 1995年4月9日（無投票）

当 菊池 平以（自民党）

当 清家 俊蔵（自民党）

第14回 1999年4月11日（投票率66.0%）

当 清家 俊蔵（自民党） 9,553票

当 菊池 平以（自民党） 7,418票

日野 啓佑（無所属） 1,054票

第15回 2003年4月13日（無投票）

当 清家 俊蔵（自民党）

第16回 2007年4月8日（投票率57.1%）

当 梶谷 大治（無所属） 13,348票

当 清家 俊蔵（自民党） 11,927票

福岡 英二（無所属） 1,197票

注）第1，2回は定数1。第3回以降は，自治体合併にともなう増員で定数2。第15回（2003年）は定数1減。第16回（2007年）は，八幡浜市選挙区と西宇和郡選挙区が統合され，定数2。

参 考 文 献

今井琉璃男（1966）『愛媛県政二十年』若葉社

共同通信社編（2005）『地域を元気にした港50選』共同通信社

西村裕子（2009）「八幡浜ちゃんぽん／まちおこしの起爆剤に」関満博・古川一郎『「ご当地ラーメン」の地域ブランド戦略』

八幡浜市誌編纂会（1987）『八幡浜市誌』八幡浜市

*本稿を執筆する上で，豊予社社長・菊池住幸氏およびNPO全国町並み保存連盟理事・岡崎直司氏から貴重なお話をおうかがいし，参考にさせていただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。また，仲介の労をとってくださった門田眞一氏にも感謝申し上げます。なお，文中に誤りがあれば，それはすべて執筆者の市川の責任です。